

能〈桜川〉

※四番目物。五流の現行曲。世阿弥作。

「桜川 是ニ出タル物狂ノ」(『五音 上』)

「桜川に、「曇るといふらん」、これはかひなめらかす所也」(『申楽談儀』)

※素材

桜川といふ所ありときゝて

常よりも春べになれば桜川波の花こそ間なく寄すらめ 紀貫之(『後撰和歌集』) など

※詞章は現行観世流謡本による。「一」二小段名。「三」四コトバ。「五」六フシ。

※登場人物

前シテ―母

後シテ―狂女(前同人)

子方―桜子

ワキ―磯部寺住僧

ワキツレ―従僧(二、三人)

ワキツレ―里人

ワキツレ―商人

第一段 ワキツレの登場 商人が桜子の母のもとを訪ねる

「名ノリ」 商人「かやうに候者は、東国方の人商人にて候、我久しく都に候ひしが、この度は筑紫日向にまかり下りて候、また昨日の暮ほどに幼き人を買ひ取りて候、かの人申され候は、この文と身の代とを、桜の馬場の西にて桜子の母と尋ねて、たしかに届けよと仰せ候程に、只今桜子の母の方へと急ぎ候

第二段　ワキツレ・シテの応対、シテの詠嘆　母は人商人から手渡された桜子の手紙を読む

「□」　人商人「この辺にてありげに候、まづまづ案内を申さばやと存じ候

「問答」　人商人「いかに案内申し候、桜子の母の渡り候か　シテ「誰にて渡り候ぞ　人商人「さん候桜子の御方より御文の候、又この代物を確かに届け申せと仰せ候程に、これまで持ちて参りて候、構へて確かに届け申すにて候　シテ「あら思ひ寄らずや、まづまづ文を見うずるにて候

「文」　シテ『さてもさてもこの年月の御有様、見るも余りの悲しさに、「人商人に身を売りて、東の方へ下り候

「□」　シテ「なうその子は売るまじきものを、や、あら悲しや、はや今の人も行方知らずなりて候は如何に

「文」　シテ『これを出離の縁として、御様をも変へ給ふべし、ただ返す返すも御名残こそ惜しう候へ

「下歌」　地『名残惜しくは何しにか、添はで母には別るらん。

「上歌」　地『ひとり伏屋の草の戸の、ひとり伏屋の草の戸の、明し暮して憂き時も、子を見ればこそ慰むに、さりとては我が頼む、神も木華開耶姫の、御氏子なるものを、桜子留めて賜ひ給へ、さなきだに、住みうかれたる故郷の、今は何にか明暮を、堪へて住むべき身ならねば、我が子の行方尋ねんと、泣く泣く迷ひ出でて行く、泣く泣く迷ひ出でて行く。【中入り】

第三段 ワキ・ワキツレ・子方の登場 磯部寺住僧は從僧や桜子とともに桜川へ花見に出かける

〔次第〕 ワキ・從僧『頃待ち得たる桜がり、頃待ち得たる桜がり、山路の春に急がん。』

〔名ノリ〕 ワキ「これは常陸の国磯部寺の住僧にて候、又これに渡り候幼き人は、何処とも知らず愚僧を頼む由仰せ候程に、師弟の契約をなし申して候、又この辺に桜川とて花の名所の候、今を盛り由申し候程に、幼き人を伴ひ、只今桜川へと急ぎ候

〔上歌〕 ワキ・從僧『筑波山、此面彼面の花盛り、此面彼面の花盛り、雲の林の蔭茂き、緑の空も映ろふや、松の葉色も春めきて、嵐も浮かむ花の波、桜川にも着きにけり、桜川にも着きにけり。』

筑波嶺のこのもかのもに影はあれど君が御かげにますかげはなし 東歌（古今和歌集）

第四段 ワキツレ・ワキの応対 里人は狂女がいることを僧たちに伝える

〔問答〕 里人「いかに申し候、何とて遅く御出で候ぞ待ち申して候 ワキ「さん候皆々御供申し候程に、さて遅なはりて候、あら見事や候、花は今を盛りと見えて候 里人「なかなかの事花は今が盛りにて候、また此処に面白き事の候、女物狂の候が、美しき抄網を持ちて、桜川に流るる花を抄ひ候が、けしからず面白う狂ひ候、これに暫く御座候ひて、この物狂を幼き人にも見せ参らせられ候へ ワキ「さらばその物狂を此方へ召され候へ 里人「心得申し候

〔問答〕 里人「やあやあかの物狂に、いつもの如く抄網を持ちて、此方へ来れと申し候へ

第五段 後シテの登場 狂女が登場して桜が散ることを惜しんでは我が子を思う

〔□〕 シテ『いかにあれなる道行人、桜川には花の散り候か、「なに散り方になりたるとや、悲しやなさなきだに、行く事やすき春の水の、流るる花をやさそふらん、『花散れる水のまにまに覓め来れば、

山にも春はなくなりけりと聞く時は、少しなりとも休らはば、花にや疎く雪の色

〔一セイ〕 シテ『桜花 〔翔〕

「一セイ」 シテ『桜花、散りにし風の余波には 地『水なき空に、波ぞ立つ シテ『思ひも深き花の雪 地『散るはなみだの、川やらん。

「サシ」 シテ『これに出でたる物狂の、故郷は筑紫日向の者、さも思ひ子を失ひて、思ひ乱るる心づくしの、海山越えて箱崎の、波立ち出でて須磨の浦、又は駿河の海過ぎて、常陸とかやまで下り来ぬ、げにや親子の道ならずは、遥けき旅を、如何にせん、「ここにまた名に流れたる桜川とて、さも面白き名所あり、『別れし子の名も桜子なれば、形見と云ひ折からと云ひ、名もなつかしき桜川に

「下歌」 地『散り浮く花の雪を汲みて、みづから花衣の、春の形見残さん。

「上歌」 地『花鳥の、立ち別れつつ親と子の、立ち別れつつ親と子の、行方も知らで天離る、鄙の長路に衰へば、たとひ逢ふとも親と子の、面忘れせば如何ならん、うたてや暫しこそ、冬籠りして見えずとも、今は春べなるものを、我が子の花はなど咲かぬ、我が子の花はなど咲かぬ。

花ちれる水のまにまに尋めくれば山には春もなくなりにけり 清原深養父（古今和歌集）

さくら花ちりぬるかぜのなごりには水なき空に浪ぞたちける 紀貫之（古今和歌集）

常陸なる駿河の海の須磨の浦波立ち出でよ箱崎の松 （源氏物語・常夏）

風ふけば波も幾重の桜川名に流れたる水の春かな 藤原基家（夫木和歌抄）

あまざるひなの長路をこぎくれば明石の門より山としま見ゆ 柿本人麻呂（新古今和歌集）

思ひきや鄙のわかれに衰へてあまの縄たき漁りせむとは 小野篁（古今和歌集）

難波津に咲くやこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花 仮名序（古今和歌集）

第六段　ワキ・シテの応対　磯部寺住僧は狂女が狂乱するに至った事情を尋ねる

「□」　ワキ「この物狂の事にてありげに候、立ち寄りて尋ねばやと思ひ候

「問答」　ワキ「いかにこれなる狂女、おことの国里は何処の人ぞ　シテ「これは遙かの筑紫の者にて候　ワキ「それは何とてかやうに狂乱とはなりたるぞ　シテ「さん候唯一人ある忘れ形見のみどり子に生きて離れて候程に、思ひが乱れて候　ワキ「あら傷はしや候、また見申せば美しき抄網を持ち、流るる花を抄ひ、剩つさへ渴仰の気色見え給ひて候は、何と申したる事にて候ぞ　シテ「さん候我が故郷の御神をば、木華開耶姫と申して、御神体は桜木にて御入り候、されば別れし我が子もその御氏子なれば、桜子と名づけ育てしかば、『神の御名も開耶姫、尋ぬる子の名も桜子にて、またこの川も桜川の、名も懐かしき、花の塵を、徒にもせじと思ふなり　ワキ「謂はれを聞けば面白や、げに何事も縁はありけり、さばかり遠き筑紫より、この東路の桜川まで、下り給ふも縁よなう　シテ「まづこの川の名に負ふ事、遠きに就きての名誉あり、かの貫之が歌は如何に　ワキ「げにげに昔の貫之も、遙けき花の都より　シテ「未だ見もせぬ常陸の国に　ワキ「名も桜川　シテ「ありと聞きて

「上歌」　地『常よりも、春べになれば桜川、春べになれば桜川、波の花こそ間なく、寄すらめと詠みたれば、花の雪も貫之も、古き名のみ残る世の、桜川、瀬々の白波しげければ、霞を流す、信太の浮島の、浮かめ浮かめ水の花、げに面白き川瀬かな、げに面白き川瀬かな。

第七段　ワキ・ワキツレの応対　磯部寺住僧は里人に狂女を面白く狂わせよと言う

「問答」　ワキ「いかに申し候、この物狂は面白う狂ふと仰せ候が、今日は何とて狂ひ候はぬぞ　里人「さん候狂はする様が候、桜川に花の散ると申し候へば狂ひ候程に、狂はせて御目にかけうずるにて候　ワキ「急いで御狂はせ候へ　里人「心得申し候

第八段 シテの遊狂 狂女は桜川に散って流れる花を掬おうとする

「□」 ワキ「あら笑止や、俄かに山嵐のして桜川に花の散り候よ

「掛ケ合」 シテ「由なき事を夕山風の、奥なる花を誘ふごさめれ、流れぬ前に花抄はん ワキ「げにげに見れば山嵐の、木々の梢に吹き落ちて シテ「花の水嵩は白妙の ワキ「波かと思れば上より散る シテ「桜か ワキ「雪か シテ「波か ワキ「花かと シテ「浮き立つ雲の ワキ「川風に

「次第」 地「散ればぞ波も桜川、散ればぞ波も桜川、流るる花を抄はん

「一セイ」 シテ「花の下に、帰らん事を忘れ水の 地「雪を受けたる、花の袖 【イロエ】

花下忘帰因美景 樽前勸醉是春風 白楽天（和漢朗詠集）

第九段 シテの遊狂 狂女は桜への思いを語る

「クリ」 シテ「それ水流花落ちて春、とこしなへにあり 地「月冷ましく風高うして鶴帰らず。

「サシ」 シテ「岸花紅に水を照らし、洞樹緑に風を含む 地「山花開けて錦に似たり、澗水湛へて

藍の如し シテ「面白や思はず此処に浮かれ来て 地「名も懐かしみ桜川の、一樹の蔭一河の流れ、汲みて知る名も所から、合ひにあひなば桜子の、これまた他生の縁なるべし。

「クセ」 地「げにや年を経て、花の鏡となる水は、散りかかるをや、曇ると云ふらん、まこと散りぬれば、後は芥になる花と、思ひ知る身もさて如何に、我も夢なるを、花のみと見るぞはかなき、されば梢より、徒に散りぬる花なれば、落ちても水のあはれとは、いさ白波の花にのみ、馴れしも今は先立たぬ、悔の八千度百千鳥、花に馴れ行く徒し身は、はかなき程に羨まれて、霞をあはれみ、露をかなしめる心なり シテ「さるにても、名にのみ聞きて遥々と 地「思ひわたりし桜川の、波かけて常陸帯の、託言ばかりに散る花を、徒になさじと水を堰き、雪をたたへて浮波の、花の柵かけまくも、

かたじけなしやこれとても、木華開耶姫の、御神木の花なれば、風も避ぎて吹き、水も影を濁すなど、袂をひたし、裳裾を萎らかして、花に寄辺の、水堰き止めて、桜川になさうよ。

山花開似錦 澗水湛如藍（碧巖録）

宿一樹下汲一河流：皆是先世結縁（説法明眼論）

年をへて花のかぐみとなる水は散りかかるをや曇るといふ覽 伊勢（古今和歌集）

散りぬれば後は芥になる花と思しらずもまどふてふ哉 僧正遍昭（古今和歌集）

枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ 菅野高世（古今和歌集）

さきだゝぬ悔ひの八千たびかなしきはながるゝ水の帰りこぬ也 閑院命婦（古今和歌集）

百千鳥花に馴れたるあだしめははかなき程も羨まれけり（三流抄）

花を賞で、鳥を羨み、霞を哀れび、露を悲しぶ心、言葉多く、さまざまに成りにける 仮名序

桜散る水の面にはせきとむる花の柵掛くべかりけり 能因法師（千載和歌集）（古今和歌集）

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ 藤原好風（古今和歌集）

第十段 シテの遊狂 狂女は散る花を見て我が子への思いを募らせる

「段歌」 シテ『あたら桜の 地『あたら桜の、とがは散るぞ怨みなる、花も憂し風もつらし、散ればぞ誘ふ シテ『誘へばぞ散る花鬘 地『かけてのみ詠めしは シテ『なほ青柳の糸桜 地『霞の間には シテ『樺桜 地『雪と見しは シテ『三吉野の 地『三吉野の、三吉野の、川淀瀧つ波の、花を抄はば若し、国栖魚やかからまし、又は桜魚と、聞くもなつかしや、何れも白妙の、花も桜も、雪も波もみなならに、抄ひ集め持ちたれども、これは木々の花、まことは、我が尋ぬる、桜子ぞこひしき、我が桜子ぞ恋しき。

花見にと群れつつ人の来るのみぞあたら桜のとはにはありける 西行（山家集）

花も憂し嵐もつらしもろともに散ればぞ誘ふ誘へばぞ散る（雲玉和歌抄）

ももしきや大宮人の玉鬘かけてぞなびく青柳の糸 讃岐（新勅撰和歌集）

春の朝、吉野山の桜は、人麿が心には、雲かとのみなむ覚えける 仮名序（古今和歌集）

吉野なるなつみの河のかはよどに鴨ぞなくなる山陰にして 湯原王（新古今和歌集）

第十一段 シテ・子方の対面 狂女は磯部寺住僧の連れてくる子が桜子であることに気づく

「ロンギ」 地『いかにやいかに狂人の、言の葉聞けば不思議やな、若しも筑紫の人やらん シテ』今までは、誰ともいさや不知火の、筑紫人かと宣ふは、何のお為に問ひ給ふ 地『何をか今は裏むべき、親子の契り朽ちもせぬ、花桜子ぞ御覧ぜよ シテ』桜子と、桜子と、聞けば夢かと見も分かず、何れ我が子なるらん 地『三年の日数程経りて、別れも遠き親と子の シテ』もとの姿は変れども 地『さすが見馴れし面だてを シテ』よくよく見れば 地『桜子の、花の顔ばせの、こは子なりけり鶯の、逢ふ時も鳴く音こそ、嬉しき涙なりけれ。

第十二段 結末 狂女と桜子は故郷へ帰って出家する

「キリ」 地『かくて伴ひ立ち帰り、かくて伴ひ立ち帰り、母をも助け様変へて、仏果の縁となりにけり、二世安楽の縁深き、親子の道ぞありがたき、親子の道ぞありがたき。

能へ西行桜

※四番目物。五流の現行曲。世阿弥作。

「西行歌」(『五音 下』)

「西行・阿古屋の松、大かた似たる能也。後の世、かかる能書く者や有まじきと覚へて、此二番は書き置く也」(『申楽談儀』)

※素材

しづかならんと思ひける頃、花見に人々まうで来たりければ

花見にと群れつつ人の来るのみぞあたら桜のとがにはありける 西行(山家集)

※詞章は現行観世流謡本による。「」||小段名。「」||コトバ。「」||フシ。

※登場人物

シテ―老桜の精

ワキ―西行上人

ワキツレ―花見人

ワキツレ―同行者(数人)

アイ―能力

第一段 ワキ・アイの応対、アイの触レ 西行は能力に今年は庵室の花見を禁止すると告げる

「問答」 ワキ「いかに誰かある アイ「御前に候 ワキ「存ずる子細のある間、当年は庵室に於て花見禁制と相触れ候へ アイ「心得申して候

「触レ」 アイ「かやうに候者は、西行の庵室に仕へ申す能力にて候、さても庵室の花春毎に見事にて候間、都より貴賤群集仕り候が、当年は何と思し召し候やらん花見禁制と仰せ出だされて候間、皆々その分心得候へ、心得候へ

第二段 ワキツレの登場 花見人たちが西行の庵室へと向かう

「次第」 ワキツレ一同『頃待ち得たる桜がり、頃待ち得たる桜狩、山路の春に急がん。

「名ノリ」 ワキツレ「かやうに候者は、下京辺に住居仕る者にて候、さても我春になり候へば、此処彼処の花を眺め、さながら山野に日を送り候、昨日は東山地主の桜を一見仕りて候、今日は又西山西行の庵室の花、盛りなる由承り及び候程に、花見の人々を伴い、只今西行の庵室へと急ぎ候

「上歌」 ワキツレ一同『百千鳥、轉る春は物毎に、轉る春は物毎に、新まり行く日数経て、頃も弥生の空なれや、やよ留まりて花の友、知るも知らぬも諸共に、誰も花なる心かな、誰も花なる心かな。

「着キゼリフ」 ワキツレ「急ぎ候程に、これははや西行の庵室に着きて候、暫く皆々御待ち候へ、某案内を申さうずるにて候

第三段 ワキツレ・アイの応対 花見を望む花見人に能力は西行の機嫌を見計らつてみると言う

「問答」 ワキツレ「いかに案内申し候 アイ「誰にて渡り候ぞ ワキツレ「さん候これは都方の者にて候が、この庵室の花、盛りなる由承り及び、遙々これまで参りて候、そと御見せ候へ アイ「易き間の御事にて候へども、禁制にて候さりながら、御機嫌を見てそと申して見うずるにて候、暫く御待ち候へ ワキツレ「心得申し候

第四段　ワキの詠嘆　西行は桜の花を見ながら見仏聞法の縁を思う

「サシ」　ワキ『それ春の花は上求本来の梢に現れ、秋の月下化冥闇の水に宿る、誰か知る行く水に、三伏の夏もなく、澗底の松の風、一声の秋を催す事、草木国土自づから、見仏聞法の結縁たり。

「□」　ワキ「さりながら四つの時にも勝れたるは花実の折なるべし、『あら面白や候

第五段　アイ・ワキ・ワキツレの応対　能力の申し入れを西行は聞き入れて花見を許す

「問答」　アイ「日本一の御機嫌にて候聽て申さう、いかに申し候、都よりこの御庭の花を見たき由申して、これまで皆々御出にて候　ワキ「何と都よりと申して、この庵室の花を眺めん為に、これまで皆々来り給ふと申すか　アイ「さん候　ワキ「凡そ洛陽の花盛り、何処もと云ひながら、西行が庵室の花、花も一木我も一人と見るものを、花ゆゑ在処を知られん事如何なれども、これまで遙々来りたる志を、見せではいかで帰すべき、あの柴垣の戸を開き内へ入れ候へ　アイ「畏つて候

「問答」　アイ「いかに方々へ申し候、よき御機嫌に申して候へば、見せ申せとの御事にて候程に、急いで此方へ御出で候へ　ワキツレ「心得申し候

第六段　ワキ・ワキツレの詠嘆　西行は花のおかげで庵室の静寂が破られるのを嘆く

「掛ケ合」　ワキツレ『桜花咲きにけらしな足引の、山の峽より見えしまま、この木の下に立ち寄れば　ワキ『我は又心異なる花の下に、飛花落葉を觀じつつ、独り心を澄ます処に　ワキツレ『貴賤群集の色々に、心の花も盛んにて　ワキ『昔の春に帰る有様　ワキツレ『隠所の山といへども　ワキ』さながら花の　ワキツレ『都なれば

「上歌」　地『捨人も、花には何と隱家の、花には何と隱家の、所は嗟峨の奥なれども、春に訪はれ

て山までも、浮世の性になるものを、げにや捨ててだに、この世の外はなきものを、何処か終の住処なる、何処か終の住処なる。

第七段 ワキの詠嘆 西行は人が群れ来るのは桜の咎だという歌を詠む

「問答」 ワキ「いかに面々、これまで遙々来り給ふ志、返す返すも優しうこそ候へさりながら、捨てて住む世の友としては、花ひとりなる木の下に、身には待たれぬ花の友、少し心の外なれば、『花見んと群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の、とがにはありける

「歌」 地『あたら桜の蔭暮れて、月になる夜の木の下に、家路わすれて諸共に、今宵は花の下臥して、夜と共に眺めあかさん。

第八段 シテの登場 老桜の精が登場して西行の詠んだ歌を口ずさむ

「サシ」 シテ『埋木の人知れぬ身と沈めども、心の花は残りけるぞや、花見んと群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の、とがにはありける。

第九段 ワキ・シテの応対 老桜の精は西行に桜には咎はないと抗議する

「掛ケ合」 ワキ『不思議やな朽ちたる花の空木より、白髪の老人現れて、「西行が歌を詠ずる有様、さも不思議なる仁体なり シテ「これは夢中の翁なるが、今の詠歌の心をなほも、尋ねん為に来りたり ワキ『そもや夢中の翁とは、夢に来れる人なるべし、「それに就きても只今の、詠歌の心を尋ねんとは、歌に不審のあるやらん シテ「いや上人の御歌に、何か不審のあるべきなれども、『群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の、とがにはありける、「さて桜のとがは何やらん ワキ「いやこれはただ浮

世を厭ふ山住なるに、貴賤群集の厭はしき、心を少し詠ずるなり シテ「おそれながらこの御意こそ、少し不審に候へとよ、浮世と見るも山と見るも、ただその人の心であり、非情無心の草木の、花に浮世のとがはあらじ ワキ「げにげにこれは理なり、さてさてかやうに理をなす、御身はいかさま花木の精か シテ「真は花の精なるが、この身も共に老木の桜の ワキ「花もの言はぬ草木なれども シテ『とがなき謂はれをゆふ花の ワキ『影唇を シテ『動かすなり
「歌」 地『恥かしや老木の、花も少く枝朽ちて、あたら桜の、とがのなき由を、申し開く花の、精にて候なり、およそ心なき草木も、花実の折は忘れめや、草木国土皆、成仏の御法なるべし。

第十段 シテの語り舞 老桜の精は京都の桜の名所を紹介する

「□」 シテ「ありがたや上人の御値遇に引かれて、恵みの露あまねく、『花檻前に笑んで声未だ聞かず、鳥林下に啼いて涙尽き難し。

「クリ」 地『それ朝に落花を踏んで相伴つて出づ、夕べには飛鳥に随つて一時に帰る。

「サシ」 シテ『九重に咲けども花の八重桜 地『幾夜の春を重ぬらん シテ『しかるに花の名高き

は 地『まづ初花を急ぐなる近衛殿の糸桜。

「クセ」 地『見渡せば、柳桜をこき交せて、都は春の錦、燦爛たり、千本の桜を植ゑ置きその色を、所の名に見する、千本の花盛り、雲路や雪に残るらん、毘沙門堂の花盛り、四王天の栄華も、これにはいかで勝るべき、上なる黒谷下河原、むかし遍昭僧正の シテ『浮世を厭ひし華頂山 地『驚の御山の花の色、枯れにし鶴の林まで、思ひ知られてあはれなり、清水寺の地主の花、松吹く風の音羽山、此処は又嵐山、戸無瀬に落つる、瀧つ波までも、花は大堰川、井堰に雪やかかるらん。

第十一段 シテの舞事 老桜の精は桜の花の下で舞を舞う

「詠」 シテ『すはや数添ふ時の鼓 地『後夜の鐘の音、響きぞ添ふ

「□」 シテ「あら名残惜しの夜遊やな、惜しむべし惜しむべし、得難きは時、逢ひ難きは友なるべし、『春宵一刻値千金、花に清香月に影

「(ワカ)」 シテ『春の夜の 【序之舞】

「ワカ」 シテ『花の影より、明け初めて 地『鐘をも待たぬ別れこそあれ、別れこそあれ、別れこそあれ

第十二段 結末 西行が目覚めると老桜の精の姿は見えなくなっていた

「ノリ地」 シテ『待て暫し待て暫し、夜はまだ深きぞ 地『白むは花の影なりけり、外はまだ小倉の、山陰に残る夜桜の、花の枕の

「歌」 シテ『夢は覚めにけり 地『夢は覚めにけり、嵐も雪も散り敷くや、花を踏んでは、同じく惜しむ少年の、春の夜は明けにけりや、翁さびて跡もなし、翁さびて跡もなし。

日本の花―美意識の変遷

	万葉集	古今和歌集	新古今和歌集	日本人の好きな花	日本人の好きな木
①	萩 一三八	桜 四二	桜 三八	桜	桜
②	梅 一一八	梅 一八	松 一九	チューリップ	梅
③	松 八一	女郎花 一三	梅 一八	薔薇	竹
④	藻 七四	菊 一三	萩 一七	コスモス	松
⑤	橘 六六	萩 一一	橘 一一	向日葵	ハナミズキ
⑥	菅 四四	山吹 五	萩 一一	梅	銀杏
⑦	薄 四三	橘 四	柳 九	蘭	椿
⑧	桜 四二	松 三	薄 九	鈴蘭	白樺
⑨	柳 三九	柳 三	杉 八	百合	サツキ
⑩	梓 三三	藤 三	笹 七	紫陽花	木犀

万葉集は中尾佐助『花と木の文化史』（岩波新書）による。

古今和歌集は春歌く冬歌の三四二首による。

新古今和歌集は春歌く冬歌の七〇六首による。

日本人の好きな花・日本人の好きな木はNHK放送文化研究所の二〇〇七年の調査による。

能の作品と植物

夕顔	松風	藤	芭蕉	難波	道成寺	忠度	隅田川	石橋	胡蝶	菊慈童	女郎花	雲林院	芦刈
夕顔	松	※藤	※芭蕉	梅	桜	桜	柳	牡丹	梅	菊	女郎花	桜	芦
遊行柳	三輪	彭祖	花筐	錦木	東北	龍田	泰山府君	昭君	西行桜	草薙	杜若	箆	嵐山
※柳	杉	菊	花	錦木	梅	紅葉	桜	柳	※桜	橘	※杜若	梅	桜
熊野	六浦	巻絹	鉢木	羽衣	道明寺	田村	高砂	須磨源氏	桜川	鞍馬天狗	花月	老松	右近
桜	※楓	梅	梅桜松	松	木榎樹	桜	松	桜	桜	桜	桜	※松	桜
吉野天人	紅葉狩	枕慈童	雲雀山	半蔀	木賊	定家	竹雪	墨染桜	志賀	項羽	葛城	小塩	梅
桜	紅葉	菊	花	夕顔	木賊	定家葛	竹	※桜	桜	虞美人草	蔦鬘	桜	※梅

※印はその植物の精が登場する作品